

復活水神水鏡

すいじん

千葉県市原市 今泉 富士夫

水神様

田植えを終えてたつぷり水を張った水田が、極めて稀ながら壮大華麗な水鏡になる時がある。

飼い犬ジョンに引立てられるように、山田が向かう先にその水田地帯が広がっている。

暫く行くと見覚えある軽トラが路肩に止っている。細い畦道を巧みな早足で来るのは酒井である。

「稲どうだい」

「あー山田さん、順調ー」

酒井は市原臨海コンビナートに勤めながら農家も掛持ちしており、同じ工場のOB山田とは親子のような年の差だが、親子のように気安い仲である。

酒井は軽トラに戻ると

「山田さん、水神様知ってるよね」

県外から来たよそ者山田でも水神様は知っている、と言うか学校で習った子供から聞いている。この地の稲作に大切な水源で、町名と学校名の「水神」はそれに由来する。

「それが無くなるって説明会の通知来てるんだ」

「そりゃ大問題じゃないか。田圃の水どうなるんだ？」

「その時間くけど、俺やっとな米作り判ってきたところなんだ」

酒井は三年前、父親が急逝したため渋々後を継がされたという。不安げな表情に（まだ新米だからな）と思いやるも、ジョンの強い引張りには敵わない。

「ごめん、後でなー。こらージョン、水神様探検だー」

ジョンの引つ張り癖には困るが、散歩の相棒に欠かせない。

水神様はここから南に向かった山奥にあるという。

涼し気な音のする水路が併行する農道も、谷津田が尽きると東西から山が迫り、緩い上りの杣道となつて水路も管路に変わった。

やがて東側に立ちはだかる崖下に大きな異形の石碑が現れた。周囲を高木に覆われて薄暗く厳かな雰囲気さえ感じられる。

石碑の下から湧き出ているのが水神様湧水であろう。

苔むした碑面に【水神宮碑 創立文化一四年（二八一七）】そして荘重な漢詩が刻まれている。

南の山の谷間にこんこんと湧き出る聖水あり

徳を伴い一本の水路を尽きることなく流下し

永遠に水神郷を潤し民の頼りとなるであろう

雨だけが頼りの村にあっては、水争いに早魃、飢饉、さらには身売り、それらが半ば宿命であったというではないか。

そういう残酷物語を免れてきた水神の村人は「ひとえに水神様のお陰である」と、畏敬の念を強く抱いてきたのに違いない。

（これだけのものを無くするというのか）と、しばし佇んだ。

そのうちジョンがピチャピチャ飲み出した。

「こら！ ベロ出して飲むな！」

お返した、とばかり思いつ切り引っ張った。

埋没

酒井は公休一二五日と有休二〇日、農民になるが二人の出会い
はなかなか無い。

次週、山田コンビは畦道の水口を開けている酒井に遭遇し、声
をかける

「あ、山田さん、説明会だけど、水神様を盛土で埋めて谷津田は
自然公園にするんだってさ」

泥をこね流れを整えている手が怒っている。

自然公園と聞いて、山田に思い当ることがあった。

「あーそうか、あの辺一带、住宅開発するって話か？」

「そう、山林を開いて団地造るんだと」

「それに何で水神様なんだ？」

それに酒井が答えるには

近年災害が多発し、二年前には豪雨に見舞われた。その時西側
から土砂が崩れ、東側の水神様は辛うじて無事だったものの谷津
田が埋まる大きな被害を受けた。「大雨地震が多発するこの時期、
住宅地に危険な崖を残すべきではない」と住民も同意したという。

「それなら判ったが、地権者たちはどうだった？」

「皆手放したがってたね。農家も仕方ねえって。」

「ただ俺、爺さん婆さんから水神様のありがたい話、しっかり

言い聞かされてきたんだ。『米作り怠けたら罰が当る』ともね」

「移設とか水源の見返りなら、事業主がしてくれるだろう」

「石碑ぐらいなら移せるけど御神体の湧き口は生埋めなんだぜ。

地権者でもねえ俺一人声上げたら恨まれるから黙ってたけどさ」

「防災は今や優先事項だからな」

「それは判ってるが、俺にはもつと悪いこと聞いたんだよ。『水
神様無くなるなら休耕する』って言うやつがいたんだ」

「え、谷津田、ではないからこの圃場だな。それ俺も嫌だぞ」

山田の頭の中は休耕田を嫌う水鏡だが、隠居人の趣味にすぎな
いことを、真剣な酒井に言えたものではない。

「休耕田てのは周囲が大迷惑する。雑草や害虫の侵入、最悪は伝
染してどんどん広がりがる。俺、許せねえ」

「稲の病気？ ああ、便乗とか同調だな？」

「あ、それ、人のせいにするばやり易いからね」

報道によれば耕作放棄地や離農者が年々増えているとのこと。

平成の始め、冷害対応で輸入した米に悩まされた記憶が蘇える。

「担い手がいらないからと言われているけどな、どうなんだ？」

「よくそれ言われるけど俺は違うと思う。誰がいたって機械が無
けりゃやれねえ。泥まみれになってやる人なんかいるかい」

「機械化ならとつくにやってるだろう？」

「そう、学校で田植え稲刈りがあると、月給取りの子は泥んこを

喜んでたけど俺は怒った、農家をバカにしてるって。今時あり得

ねえ観光棚田みたいな辛い作業させて何の勉強かよ」

酒井の口調がだんだん激してきた。

「お前落ち着け、話が脱線してないか。酒井が後を継ぐ時、揉めたつていうのもそんなことだな？」

「そう、親父死んで古い機械が残った。『こんなので継げるか』って散々ゴネた。組合幹部まで来たので新しく買うことで承諾した。それで俺、息子にはいい農機残してやろうと思ってる」

次第に高まる声に怯えたか、ジョンがまた引つ張り始めた。

隠密工作

そのうち、山田コンビの散歩コースにあの石碑が移設された。

そこは水神水を溜める水神池の岸である。さすがに威厳は無いが、隣に新設された井戸ポンプから池に放水されていた。

「ジョンよ、また水神様、行けー」

途中の谷津田は買収後放置されているが、実は前からこうだったという。水が切れない超湿田で、機械も沈み動けないそうだ。

酒井が言うように是非を決めるのは機械のようだ。

辺りに工事の気配は無く立入規制もないが草深くになっていた。

前回来た時鬱蒼としていた樹木も伐採され、露わになった地形を見れば土砂崩れを恐れる理由がよく判る。

聖水は落葉の下からモクモク湧き出ており、それをジョンがまたピチャピチャ飲むのを見ているうち山田にある企みが湧いた。

次の休日、酒井は路肩の草刈りをしていた。

「オーイ、水神様移ったの見たかー」

「見てねえ、見る気もしねえ。『石碑が綺麗に磨かれ御影石の台に乗って立派になった』なんて喜んでるけどね」

石碑は看板でしかない、と言っているようだ。

「井戸もポンプも付いたから水の心配はもう無いぞ」

「それでも休耕するって言う家、とうとう出た」

「え？ いやいよ水神様無くなって、やる気無くなったか」

「いや、前に言ったこと覚えてるかな、怠けたら罰のこと。その罰を下す御本尊、もう無いんだからね」

「それって今時古臭いよな。まあそれならそれで何か手がないか考えた。俺だって休耕田は邪魔だからな」

続けて、あの跡地で思い付いたことを語った。

「聖水だけなら残せると思う。単純な方法だがな」

「まだ埋ってないんだ。現場にも入れるんだね」

「そう、やるなら今の内だ。湧き口が盛土に埋らないように上を覆うんだ。側溝の蓋二、三枚無いかな、古いのでもいい」

「田圃の水路に余ってるのがあるけど、それどうするの」

「湧き口の上に置くだけ、水はその下を管路に流れ込むはずだ」

「あ、それいいけど、見つかって撤去されないかな」

「大丈夫、周りは伐採済だから誰も行かない。盛土もダンプで上から落とすだけだから勝手に埋まってい」

「それって後々も心配ないの？」

「盛土は水を抜いてやるのがいい、お咎めもない、即実行だ」

翌早朝、酒井の出勤前、軽トラに側溝蓋とネコ車、それとジョンも載せて行ける所まで進んだ。上りの柚道はネコ車をジョンが大張切りで引つ張り上げた。

現場に着くと酒井は崖を仰いで埋めざるを得ないことを認め、

湧き口に手を合せ頭を下げた。それでも始めはためらっていたが、ジョンがピチャピチャ飲むのを見ると慌てて作業に掛った。手早く終わらせ流れ具合を確認、上を落葉で隠蔽、そして山田が終了宣言した。

「隠密二人と一匹の秘密だ」

復活要望

暫く後、山田コンビが成否確認のため農道を進むと、前方に盛土の緩斜面ができて上っていた。土砂崩れの危険はもう感じられない。

同時に成功を確信、併行する水路に以前と変わらぬ流れが見えたからだ。湧き口が水路に繋がっている証である。

ジョンに引っ張られていくと、盛土の裾の草むらに入りピチャピチャした。そこが新たな泉源だった。

その夜、酒井に電話すると意外に冷めた口調で

〈この後、実際どうなるのかねえ〉

この後が思い描けないのだろうと、努めて明るい口調で

「できるのは水生公園というから水神水は大歓迎だ。池やハス田を潤し、やがて水神池に流れて「水神の里」とか呼ばれるぞ」

〈あー、それ見て皆の意識が変わるといいね〉

弾んだ声を聞いて、山田は次の企みを思案した。

次の休日、麦藁帽子の酒井を見付けると

「お前のとこの町会から役所に要望書出してもらえないかな。できる公園に水神水を流してもらおう件だよ。それを言い出すのは農

家がいい、誰か頼める人はいないか？」

「それはもう組合長しかいない。町会長より実力あるし、俺を強引に掛持ち百姓にしたのもこの人、貸しがある」

「それほど剛腕なら、役所にも強いんじゃないか？」

「そう、農政課とはツーカーみたいだよ」

そして出された要望書には、概ねこう書かれていたという。

農政課長殿

水神農地組合長

公園予定地の南端、盛土の法面下部から大量に湧き出ている水は、かつての水神様湧水であることは間違いない。

それを公園内に回流した後、水神池に流して頂きたい。

それらを農業遺産の奇跡的復活とすれば、水神の農業に大きな活力となり、かつ自然公園の意義と価値も高まると確信する。

後日、谷津田に行ってみると、水路にソーラーパネルの付いた

水量計が設置されているのを発見した。

早速事業主に話を通じ、確認調査を始めたのに違いない。

水神様復活

その後、谷津田も埋立てられ公園の造成が始まると、水神水は仮設水路やホースを伸ばし水神池に流されていた。

そして工事は進み、ゴールデンウィーク初日【水神湧水公園】が開園、多くの来園者を迎えた。

開発で生れた住宅団地に越してきた若い家族連れが、池や水路、水生花園そして大広場で遊び楽しむ姿が見られた。

旧集落の住民も来ていたが、酒井は田植えの最中という。

山田コンビが公園の南端に直行すると、あつと驚いた。

そこに見えたのは、かつて山奥にあつて村民が崇拜してやまな水神様ではないか。これは山田も想定外だ。

石碑こそ無いが天然風の石組みに加え、周囲を高い植栽木で覆っているため、あの聖地に踏み込んだような錯覚さえ覚える。湧水は園内を回流して水神池に流れているのだろう。

それらに見とれていると、旧住民と思しき一行の騒ぐ声、そして重鎮格の男が発する大声

「いやーいや、これまさしく水神様でねえかい。石碑移す時神主の後ろから拜んでたが、あれとそっくりだぞ。さすが水神様、見事に復活した。まさに奇跡だあ、ワッハッハ」

要望した結果を見に来たらしく全員驚喜に包まれている。

「これだと金も掛ったべな、事業主よくやってくれたもんだ」

「それでもねえ。元々は集水管を何百メートルだか埋めて水源を作る設計だったそうだ。そこに俺らが要望出したもんで、役所はすぐ事業主に頼んだら飛び付いたんだってよ。この方が全然安上がりだからな」

「いや、これ組合長の策略だ、これで俺らを押っぺす気だっぺ」

「おー判ったか。休耕田ばっか出してたら水神様怒って組合倒産だ。これからは皆で協力しねえとな」

「あーそれで共同営農やるとか言ってたんだな」

「おっさ（そうだ）、いい農機持つてるやつに出てもらう、酒井なんかによ。酒井だから『水神様が生きてる』って張り切つて来たの。親父死んだ時、何とか後継ぎさせたが見込んだとおりだ」
そこでジョンがピチャピチャしだしたのでその場を離れた。

翌週、田植えが終った所を見回っていると酒井が通り掛かり

「新しい水神様できたつてね。子供ら大喜びしてた」

「部落の重鎮達も、あれ程とは思わなかったな。そこで『酒井は見込みある、いい農機持つてる』なんてことも言ってたぞ。かなり期待されてるな、アハハ」

「その人組合長だな。俺に親父の生命保険とローン組ませて、農機買わせやがったくせしてよく言うよ」

「アハハ、やっぱりそうか。こうも言っていた『休耕田出してたら組合倒産だ』つて、そうなのか？」

「そう、組合長の頭はそれでいっぱいらしい。圃場の造成に多額の補助を受けて、さらに銀行の融資も受けるからやり繰り三昧、休耕田から分担金取りにくいからね」

稲作代行

八月も半ばになると早生種は穂を出し始める。

山田コンビが涼しい早朝の散歩中、酒井に遭遇した所は灌水かんすいされているが、何も生えていないから最近休耕田になったようだ。

「早いなあ。こんなとこに酒井の田圃あつたか？」

「これはうちのじゃなく見に来ただけ。今日、工場早出なんだ」

「あ、あれ通勤の車か。それで人の田圃の見回りかい？」

「きのう俺ら四人、組合に集められたんだよ。役員と役所の専門家もいて、『休耕田無くす、お前らの新型農機で頼む、金も入るようにする、消防団は免除する』なんて組合長の大激励があった」

「公園でも、何かするようなこと言ってたからな」

「ここは俺〔稲作代行〕するからね、それで見てたんだ」

「え、稲作代行？ 何でも代行流行りだが初耳だ」

（出勤を邪魔してはならない）山田は別れた。

水神初の稲作代行に至った経緯はこうだ。

組合に二軒の家から「田四枚休耕する」との申し出があった。両家は稲木という同族で共用の農機が老朽化し耕作不能という。

丁度その頃水神様の「埋没↓復活」が起った。それに乗じ稲作代行の導入を決めた。酒井ら四人が一枚ずつ担当、面積に応じた代行料を組合が徴収し、四人に配分する仕組みを作ったのである。

それを聞いた山田は、酒井に懸念をぶつけた。

「そんな勝手な家の代行とは、やり過ぎ働き過ぎではないか。水神様のことは、お前に苦勞掛けるためにやったのではないぞ」

すると酒井は論すように

「山田さん、今や水神の米農家は殆ど掛持ちだよ。専業は定年過ぎた人、新型農機使って八〇歳でやってる人さえいる。俺は若いし身体も時間も余裕ある、あと一枚ぐらい楽勝だよ」

「酒井は工場でも働きの者だから、無理しないか心配だ」

そこで酒井は思い切ったように

「じゃあ全部白状する。あと何年かして俺の農機も買い替えになる。その頭金が貯まんねえ。米収入がローン返済に行っちまうんだ。だから代行は渡りに船、他の三人も事情は皆同じなんだよ」

「それじゃ今まで機械のために稲作やってたのか？」

さすがに苦渋の表情になり

「実はその通り。三年目にそれが判って悩んでた。だけど今度は四枚の田を生かす使命をもらった。四人で『俺らの農機を水神に役立てよう』って決めたんだよ」

「だったら、お前の家庭や工場にも支障なくやれるのか？」

「やれる、約束する。一に水神米、二に先祖伝来の田、三が水神様の教訓、この三つを守る。そして我が家のためにやる」

「そうか、覚悟の程よく判った。これ一石二鳥、いや四鳥かな。だけど無理だけは決してするなよ」

酒井が言っていたが、機械が能否を決め、水神様が背中を押しているようだ。

代行元年

翌年三月、水田地帯にトラクターが蠢き、それをシラサギが追う。何台ものエンジン音が協和し、耳によっては春の調べに聞こえる。それを鑑賞するかのように山田コンビはのんびり散歩だ。

米農家の三種の神器はトラクター、田植え機、コンバインだが、全部揃えると高級車何台分か。それを自家専用にして成り立つのか疑問に思っていた。酒井は「代行に活かす」と宣言している。

その酒井のトラクターがザクザク耕しているのは代行田のよう

だ。畦道にいるのは依頼人の稲木Aさんか？

「やあ稲木さん、お久しぶり。酒井の機械って頼もしいね」

「組合が酒井よこしてくれたんでありがてえ。俺らのボロ機械ではもう無理だ。けどあんなの持つ程の土地もねえし大助かりよ」

「それで収穫した米は稲木さんに渡るんだね」

「おっさ、それ売って酒井に金払う。今まで正月に来た子や孫らに、持たしてやってたが『もうやれねえ』って知らせたんだわ。したっけ横浜にいる息子のやつ言い出しやがった『定年になったら戻って百姓やる』ってな。それって今流行りだから本気かどうか」

「それでも、休耕田にしないで良かったね」

「ほんと、それしてたら喧嘩になってたわい。それまで俺、生きてつか判らねえが、組合がうまく引き継いでくれっべ、滑り込みセーフだ、アハハ」

「アハハ、いい息子さんだね」

「息子だけでねえよ、俺も水神の者全部だ。水神様が隠れたり出たりして揺さぶるもんで眼醒めたんだべな。水神にや水神様ねえっかなんねんだな」

この稲木さんは満足の様子だが、稲木Bさんはどうだろうか。

この年お盆を過ぎると千葉米（ふさおとめ）の稲刈り週間となった。あの四戦士も勇躍出動しているはずだ。

その一人が三条刈りコンバインで刈っている所に遭遇した。

刈り取った籾を運搬するのは稲木Bさんらしく、荷台にコンテナを装備した軽トラで待機している。

「凄い機械だね、一台で何でもこなすんだ」

「俺も感心してる。俺らのは刈るだけだったから、束ねてハセ掛け脱穀と何日も掛った。それがたった半日だからよ。これ見たらボロ機械なんかでやってられねえよ。だからって、買い替えてたら本業の稼ぎも無くなっちゃうよ。代行頼んで正解だった」

「それでこの軽トラでお宅に運ぶんだね」

「いや、ライスセンターだ。乾燥、糶摺り、袋詰め、全部機械だから俺でもできる。ちっとでも百姓やれば水神様にも胸張れる」

こうして代行元年も成功裏に収まり、四枚の田が生かされたうえに酒井達も潤ったはず、次の跳躍台にするだろう。

その後、代行人希望者が何人か手を上げたという。それなら今後、代行依頼が増えても対応できる。

パワースポット

ある日、山田コンビが湧水公園に立寄ると異な物を目にした。水神様の周囲に粗末な木札が何枚か下がっている。それには何か書いてあり、野球、サッカー、剣道等の拙い字が見える。

翌休日、畦道を直している酒井を探し当てた。

「水神様の所に変な木札が下がってたが、あれ何かな」

「えーと、あ、それ多分水神中のだな。一年の息子が『サッカー部じり貧だ』ってうるせえから『水神様にでも頼め』って追っ払った覚えがある。そうか、準決勝まで行けたのはそれだったか、アハハ。それで他の部活も真似したんだな」

「え、勝利祈願の絵馬、稲作の神様にかよ」

子供たちにとり、元の水神様は山奥にあって見たことが無い。それが身近な公園に出現したので「学校名のルートだから何でも願いを聞いてくれる」と考えたのだろう。

「復活のパワースポットなんてことも言ってたな。それにあのチバニアンも逆転のスポットなんだってさ、アハハ。逆転のチャンスに『チバニアン、チバニアン』って唱えるんだそうだ、アハハ。中学生になっても無邪気でいやがる、アハハ」

「チバニアンはいいが、俺冷や汗出る。酒井はどうだ？」

「山田さん、隠密工作のこと気にしてんの？ 水神の功労者なんだから、どっしりとしてればいいんですよ、アハハ」

自信も備わってきたらしく、酒井の方がどっしりしてきた。

その時から山田コンビの散歩コースに湧水公園を加えたある日、水神様の前の大広場でサッカーをする中学生数人に遭遇した。そう言えば学校からランニングで五分程の距離だ。

ボール拾いに来た一人がジョンの頭をなでながら

「お前、ジョンだな。昔、犬ぞり引いてたろ」

「アハハ、お前たちここで部活か」

「いえ、今日は校庭が野球部なんで自主トレ。水神様の前でやるといいんです。その水神様だけど、ジョンが発見したんだってね」

(びっくりさせやがる) 山田はさりげなく

「あー、ここ掘れワンワンだよ。そうか、酒井の息子だったか。

お父さんはな、水神の星だ。お前も頑張れよ」

「僕はね、農機のオペレーターになって、あっちこっち田圃回り

ながら新型操作して農作業してやります」

「アハハ、それはいい。親子揃って機械信者なんだな」

水神の将来は明るい。

出現！ 壮麗水鏡

こうして何年か経ち、田植え時になった。

山田を引っ張るジョンの力は衰えたが、水神を引っ張る四戦士、いや今は十勇士だが、機械を駆使した働きが目覚ましい。

休耕田の再生は元より田面拡大で畦道を減らしたことで、山田が密かに望んでいた「曇りの無い完璧な水鏡」ができ上っている。残るは「空」である。

この日夕刻、頭上は高曇、東京のもっと西方に雲の切れ目が見え、明日の晴を予告している。この時期には難しい条件が揃った。

やがて、東京湾沿いに林立するプラント群が影絵を作り、鳥の群がねぐらに帰る頃合いとなった。

すると、秩父多摩の山脈と雲の切れた隙間から太陽が顔を覗かせ、頭上の高雲を下から照らして真っ赤に染めた。

それが満天に広がるや、一辺が一キロもある水鏡に反映し、天と地を異様且つ壮麗な世界にした。

その中を行く山田は、ねぐらに帰る鳥になるのだった。水神の明日は間違いなく日本晴れだ。

完